

夏目漱石の小説作品における 「訛り」について

—森田草平『文章道と漱石先生』を手がかりにして—

小 川 栄 一

1. 漱石の東京「訛り」

夏目漱石の小説作品における会話は、方言による会話を別にすれば、当時の東京語によって書かれている。登場人物の多くは山の手ことばを用いているが、その一方で作品中にしばしば下町ことばを用いる人物が登場する。のみならず、山の手ことば、下町ことばの言語的特徴が細部にわたって写されており、それぞれを彷彿とさせている。このことは漱石の出身に由来するものに他ならない。漱石は、1867年2月9日（慶応3年1月5日）、牛込馬場下横町（現在の東京都新宿区喜久井町）の生まれであるが、明治元年（1868）に塩原昌之助・やす夫妻の養子となって、翌年10月頃から養父母とともに浅草三間町に住み、いく度かの転居を繰り返した後、明治9年（1876年。漱石9歳）に養父母の離婚のため牛込の生家に引き取られ、その家で成長している。漱石の言語形成期における居住地からすれば、下町ことば、山の手ことばの両方に通じていたものと考えられる¹⁾。

漱石が作家活動を始めた明治30年代は、標準語が制定され、学校の国語教育を通じて全国に普及が図られた時期である。第一次国定国語教科書『尋常小学読本』（明治37年<1904>）の編纂趣意書において「文章ハ口語ヲ多クシ用語ハ主トシテ東京ノ中流社会ニ行ハルルモノヲ取りカクテ国語ノ標準ヲ知ラシメ其統一

1) 田島優『漱石と近代日本語』（翰林書房 2009年）P48。

ヲ図ルヲ務ムル」とあるとおり、標準語は東京中流社会の話しことばを基礎にしたものといわれるが、必ずしも当時一般的な東京語そのままではない。父母の呼称について、『虞美人草』や『三四郎』などの作品までは主として江戸語以来の「おとっさん」「おっかさん」を用いていて、これは当時の東京語の状況を反映するものと考えられる。これなどは漱石の用語が標準語と一致していない例であるが、漱石も以後次第に標準語形の「おとうさん」「おかあさん」を用いるようになる²⁾。このように漱石の作品も東京語と標準語と、両者のせめぎ合いの中に置かれていたことがいえる。

これに関連して、漱石の弟子の一人で、小説『煤煙』などの作品でも有名な森田草平（明治14年～昭和24年<1881～1949>）がその著書『文章道と漱石先生』（大正8年<1919> 春陽堂）において述べるのが参考になる。

現今東京語は全国の標準語に成つて居る相だが、又東京語位訛の多い方言は減多にあるまい。そして、漱石先生は此訛をそつくり其儘作中に使つて居られる。(164-3)³⁾

上記のとおり森田は東京語が標準語となっていることを認識しつつも、東京語ほど「訛り」^{スラング}の多い方言はないといって、漱石作品における多くの「訛り」の実例を挙げている。ここで「訛り」というからには森田の考える日本語の標準があったはずである。これについて森田の明言はないが、『文章道と漱石先生』を読む限り当時の一般的な日本語の慣用ということと思われる、東京語を基盤とする標準語とは異なるものと考えられる。

そもそも『文章道と漱石先生』は漱石の死後、森田が漱石作品の文章表現や言語について述べた書である。この中にはしばしば漱石との思い出話を交えるなど多分に随筆風でもあって、方法論的な厳密性と客観性に欠けるので、語学の専門書と呼べるものではない。しかし、漱石作品における表現上の特徴について、漱

2) 拙稿「漱石作品における標準語法の採用」（武蔵大学『人文学会雑誌』39-1 2007年7月）。

3) 本稿における『文章道と漱石先生』の引用では原文にある旧字体の漢字を新字体に改め、ふりがなは特に必要のない限り省略している。

石本人から親しく教を受けた森田ならではの指摘が随所であって、この意味において大いに注目に値する。少なくとも漱石の言語の特徴を研究するには得たい資料である。ただし、「訛り」という言い方をすると通常は「地方訛り」を連想させるので、本稿では森田のいう「訛り」を「東京訛り」と理解して用いることにする。

『文章道と漱石先生』において特に注目されるのは、次の記述のとおり、漱石の言葉づかいにも特有の「癖」があって、それを他の人から注意されても漱石は頑として認めなかったと述べたことである。

私どもから見れば、先生特有の語法と云ひたいやうな、先生の癖がある。

<略>処が、偶々それを注意する者があつても、強情な先生は頑として、自己の間違ひを承認せられなかつたのである。(8-2 以下)

森田は岐阜県方県郡鷺山村（現岐阜市）の出身である。本書でも述べられたとおり、森田は東京で暮らすようになっても漱石など東京出身者の用いる東京語にはあまり精通していなかったようだ。そのため東京語に違和感を感じただけに、外からの視点に立って漱石作品の言語の特徴を子細に観察している。後に述べるとおり、『文章道と漱石先生』に指摘された「訛り」なり「癖」なりといった捉え方は妥当でないものが多いが、その一方で森田の記述は漱石作品の言語を理解し考察するための良い手がかりになる。森田のいう漱石の「訛り」が当時の東京語にもあったものか、それとも漱石の個人的な使用（森田のいう「癖」）であったのか、この究明は漱石の生きた明治・大正期における東京語の実態を探究し、東京語と標準語との関係を明らかにする上においても重要な意義がある。本稿では漱石の東京訛りを手がかりにして、漱石作品における語彙・語法の特徴を明らかにするとともに、漱石があえて自身のことばづかいにこだわった理由についても考察する。なお、『文章道と漱石先生』に指摘された漱石の語彙については田島優前掲書（注1文献）の中でも一部分触れられていて、本稿でも大いに参考にしているが、さらに幅を広げて検討を行っていく。

なお、本稿の底本は『漱石全集』の最新版（岩波書店 1993年）である。この版は「原稿等の自筆資料が現存するものについては、できるだけその自筆資料

を底本として本文を作成した⁴⁾ という方針に従って、原稿等の自筆資料を忠実に再現する姿勢をとっている。漱石自身も述べていることであるが、漱石の作品が原稿から活字になる過程で漱石の意図しない形で振り仮名が付けられたり、原稿から変更されたりすることがあった⁵⁾。漱石自身の用語を明らかにしようとする本稿の研究にとって、この全集における原稿依拠の校訂方針は適したものになっている⁶⁾。

2. 東京訛りの実例（音訛に関するもの）

森田の指摘する漱石の「訛り」とはどのようなものか、『文章道と漱石先生』の該当箇所を引用する。

生粋の江戸っ子だけに、先生の作には随分江戸っ子の^{スラング}訛りが出て来る。此訛りを看過すると、全体の文章其者が可也間の抜けたものに成り得る。先生自身大分それを気に懸けて居られたものらしい。原稿を見ると、「目眩しい」と云ふやうな所に、わざわざ「まぼしい」と仮名が振つてある。(7-5)

森田のいう「江戸っ子」とは江戸・東京生まれの人という意味で用いられている。ここで「^{スラング}訛り」の例として指摘された「まぼしい」について、前掲の田島書（第四章以下）に詳しい考察がなされているが、漱石作品においてどのように現れているか実例を掲げてみよう。(下線筆者。以下同様。)

町へ出ると日の丸だらけで、まぼしい位である。(坊っちゃん・十2-368-8)

女の一人はまぼしいと見えて、団扇を額^{ひたひ}の所に翳してゐる。(三四郎・二の四 5-301-1)

漸くの事で戸を一枚^あ明けると、強い日がまともに射し込んだ。眩しい位であ

4) 「今次『漱石全集』の本文について」(『漱石全集』)。

5) 明治40年8月8日渋川柳次郎宛書簡(『漱石全集』23-106)。

6) ただし、「原稿等の自筆資料を参看できない場合は、原則としてもっとも早く活字として発表された資料を底本として本文を作成した」(同前)ともなっている。本稿にあっては念のため、『漱石全集』が自筆資料に依っていない作品(坑夫、行人など)において、振り仮名によって示される例は掲げないこととする。

る。(三四郎・四の十二 5-374-15)

眉を寄せて、ぎらへする日を少時見詰めていたが、眩しくなつたので、
(門・一の一 6-347-7)

派生語「まぼしように」の例もある。

毬栗頭をむくりと持ち上げて主人の方を一寸まぼしさうに見た。(吾輩は猫
である・十 1-458-1)

野だはまぼしさうに引き繰り返つて、(坊っちゃん・五 2-300-11)

代助はまぼしさうに、電気燈の少ない横町へまがつた。(それから・十七の一
6-334-6)⁷⁾

これらがすべて地の文の例であることから、漱石は「まぼしい」を正規の言
い方と認めていたものと考えられる。もちろん、「まぶしい」の使用例もある。

こいつは変だとまぶしいのを我慢して昵と光るものを見詰めてやつた。(吾
輩は猫である・九 1-364-1)

ランプの灯がまぶしい様に眼には入つて来たんだから、おどろ
三十二 5-92-12)

「まぼしい」は、江戸時代の方言を記した越谷吾山『物類称呼』(安永4年
<1775>)では江戸の方言として記されている。

まぼゆし
羞明といふ事を、中国にて○まぼそしと云、江戸にて○まぼしいと云 (巻
五 11ウ)⁸⁾

また、為永春水『春色辰巳園』(天保4~6年<1833~35>)⁹⁾にも以下の例があ
る。

あんどうをいだす。「あださん、おめへはまぼしかろう。(後五・八回 312-13)

「まぼしい」は東京になっても引き継がれていたものと考えられる。大槻文彦
『大言海』に、

まぶ・し (形) 眩 [まぼしノ転 (東京)]

7) 「眩」に付けられた振り仮名「まぼ」は原稿にもある。

8) 古典資料研究会発行の複製(古典資料29)による(藝林舎 1972年)

9) 中村幸彦『春色梅児誉美』(『日本古典文学大系』64 岩波書店 1962年)による。

まぼ・しく略>マブシ。(東京)マボシイ。

とあって、「まぼしい」が東京で使われることを記している。田島によれば(注1文献P97)、「まぼしい」を用いた作家として二葉亭四迷や岩野泡鳴の例を挙げている。筆者が発見したこれ以外の作家では宮本百合子や林芙美子の作品に例がある。

特別今私は自分がまぼしくて海が駄目だから、猶更です。(宮本百合子「獄中への手紙」昭和18年<1943>6月1日 22-82-6)¹⁰⁾

^{なみだ}涙のにじんだ^め目をとちて、まぼしい^ひ灯に私^{わたし}は額^{ひたひ}をそむけた。(林芙美子『放浪記』古創 199-12)¹¹⁾

林芙美子は九州・中国地方の出身であって、作品中の用語に出身地の方言が混じる可能性が予想されるのでおくとして、宮本百合子(1899~1951年)は漱石の生まれ育った牛込にも程近い東京小石川の生まれで、その地で成長しているので、東京語の使用者であったといえる。

斎藤秀一「旧市域の訛語」¹²⁾にはuとoの交替の例として、

マボシー 眩しい。(P309)

を掲げている。国立国語研究所『日本言語地図』(第1集1966年)によると、「まぼしい」は栃木県、茨城県、千葉県の一部など関東地方と西日本では但馬地方、丹後地方などにも見えている。なお、増井典夫によれば、「まぼしい」は「まぼそい」から「まぼしい」を経て生まれたともいわれている¹³⁾。いずれにせよ「まぼしい」は漱石独自の語というわけではなくて、かつての江戸・東京において使われた語であったことがわかる。

次に、森田によれば漱石は「くすぼる」を使っていたという。

『坊ちゃん』の中でも、「^{くす}燻ぶる」は「^{くす、く}燻ぼる」と発音される。(164-5)

-
- 10) 宮本百合子作品の引用は『宮本百合子全集』(新日本出版社 2000~04年)による。
11) 1930年刊の改造社版を複製した『精選名著復刻全集 近代文学館』(ほるぷ出版 1972年)による。
12) 斎藤秀一編『東京方言集』所収(1936年発行 1976年再刊 国書刊行会)。
13) 「形容詞「まぼしい」の出自について—「マボソイ」→「マボシイ」→「マブシイ」—」(愛知淑徳短期大学『淑徳国文』33 1992年)

その『坊っちゃん』の例とは以下のものである。

天井はランプの油煙で燻ぼつてるのみか、低くつて、思わず首を縮める位だ。

(三 2-276-6)

『倫敦消息』(1901)にも例がある。

人は「カムバーウェル」の様な貧乏町にくすぼつてると云つて笑うかも知れないが(二 12-12-9)

これ以外は「くすぶる」になっている。

所が杉原の方では、妙な引掛りから、宗助の此所に燻ぶつてゐる事を聞き出して、強いて面会を希望するので、(門・四の五 6-386-10)

夫を通り過ぎると黒く燻ぶつた台所に、腰障子の紙丈が白く見えた。(門・七の二 6-436-4)

僕は今云つた通り、妻としての彼女の美しい感情を、さう多量に受け入れる事のできない至つて燻ぶつた性質なのだが、(彼岸過迄・須永の話十二 7-237-12)

「くすぼる」の例は起源が古く、すでに中世からある。

『玉塵抄』(永禄6年<1563>)四二¹⁴⁾

无明煩惱ノ心ノ中ニアツテゼンへニクスボリツルヲ云ソ (127-3)

安原貞室『かたこと』(慶安3年<1650> 白木進『かたこと』笠間書院 1976年)

ふすぶるを ○くすぼるは如何。(三・239)

近代の日本語辞書として、J. C. ヘボン『和英語林集成』(第三版 明治19年<1886>)に、

KUSUBORI, -RU クスボル 黝 i.v. To be smoked, smoky, to smoulder.

とあって、「くすぶる」の立項がなく、大槻文彦『大言海』にも「くすぼる」が立項されて、

(一) ふすぼるニ同じ。クスブル。イブル。

とある。このように「くすぼる」は東京独特の「訛り」でもなければ、漱石の

14) 近思文庫古辞書研究会編輯『古辞書抄物 韻府群玉・玉塵抄17』(大空社 1999年)による。

「癖」でもない。

次に、森田は「さみしい」「さむしい」を指摘する。

「さびしい」は「さみしい」又は「さむしい」だ。(164-5)

「さみしい」は以下の例を始めとして漱石作品に多数の例がある。

独りで坐つてみると、淋しい秋の初である。(三四郎・三の九 5-330-9)

一寸見ると何所となく淋しい感じの起る所が、古版の浮世絵に似てある。

(それから・四の四 6-61-11)

彼等の生活は淋しいなりに落ち付いて来た。(門・十七の一 6-555-10)

「さびし(い)」は平安時代より例があり、標準的語形といえるが、「さみしい」も江戸時代から現代において広く用いられていて、『大言海』にも立項している。

さみ・しい(形) 𩇛 [さびしノ転、又、転ジテ、さむしい]

斎藤秀一「旧市域の訛語」(注12『東京方言集』所収)にも、bとmの交替の例として、

サミシー 淋しい。(P315)

が掲げられているので、当時の東京でも「さみしい」が用いられていたことがわかる。

「さむしい」の例も多数ある。

「近頃は女許りで淋しくつていけません」(虞美人草・二 4-35-15)

「三千代さんは淋しいだらう」(それから・十三の七 6-242-7)

「さうね。内幸町へ行つても好いけど、あんまり広過て淋しいから。(彼岸過迄・須永の話二十九 7-288-9)

「私はちつとも淋しくはありません」(こころ・七 9-21-6)

「津田君、僕は淋しいよ」(明暗・三十七 11-117-9)

「さむしい」は現代の東京では廃れているが、江戸語における例は多い。『日本国語大辞典』(1972~76年)によれば、洒落本・梅暮里谷峨『二筋道三篇霄の程』(寛政12年<1800>)、人情本・為永春水『春色梅児誉美』(天保3年~4年<1832-1833>)、滑稽本・梅亭金鷲『七偏人』(安政4~文久3年<1857~63>)、中村正直訳『西国立志編』(明治4年<1871>)、仮名垣魯文『西洋道中膝栗毛』(明治3~9年<1870-1876>)、長塚節『土』(明治43年<1910>)などに現れた

例が挙げられている。「さむしい」も漱石独自の言い方というわけではない。

次に、森田によれば漱石は「道理で」を「どうれで」と言ったというが、これは面白い言い方である。

『坊ちゃん』の中でも、<略>「だうりで」は「どうれで」と発音されて、「どうれで変だと思つた」と云ふやうに使はれて居る。然も先生は「どうれ」で「道理で」から転訛したものと気が附かないで、全く別な言葉だと信じて居られたと云ふから驚く。(164-5)

漱石作品における「どうれで」の例は以下のとおりである。

「小供を連れて、さつき出掛けた」「どうれで静かだと思つた。(吾輩は猫である・十一 1-492-6)

「…ちや古賀さんは行く気はないんですね。どうれで変だと思つた。(坊ちゃん・八 2-347-10)

「どうれで、六づかしい事を知つてると思つた。(草枕・四 3-55-13)

「道理で生粋だと思つたよ」(草枕・五 3-57-10)

「道理で頭に瘤が出来てらあ。(草枕・五 3-69-5)

「どうれで知らずに通つた訳だな、君」(虞美人草・八 4-143-4)

「道理で見えないのね」といつたが(彼岸過迄・須永の話二十四 7-272-6)

「どうれで」はすでに江戸語から例があつて、式亭三馬作の滑稽本『浮世風呂』(文化6~10年<1809-13>)にも現れている。

「道理で色が悪い。(二編上 114-13)¹⁵⁾

また、斎藤秀一「旧市域の訛語」にも、

下ーレデ 道理で。(副詞)(N)(P308)

とあるので、その当時東京で用いられた独特の言い方であったことがうかがわれる。ちなみに、『浮世風呂』には「どうれで」に限らず、「道理」それ自体に「どうれ」、「だうれ」と振り仮名を付けている。

「この人は声自慢だはな。道理だ。(三編下 211-14)

15) 『浮世風呂』の引用は中村通夫校注『日本古典文学大系』(岩波書店 1957年)による。以下同様。

「あれは鶴賀新内の元祖¹⁶⁾の家元だ¹⁶⁾とよ。「道理^{だうり}だ。(四編下 276-08)

このように『浮世風呂』では「道理」自体の読みに「どうれ」があったが、漱石の場合「どうれ」となるのは「道理で」の場合に限られる。このことが両者の相違点であり、時代による変化と思われる。なお、漱石作品には「どうりで」もある。

「どうりで、知らないと思ひました。(吾輩は猫である・六 1-232-1)

「道理^{だうり}でばかんとして居^ゐと思つた。(それから・十四の二 6-254-5)

森田によれば、漱石は「へぎ折¹⁷⁾」を「へげ折」、「おとむらひ」を「おともらひ」としていたという。

なほ『虞美人草』の中では、「へぎ折」を「へげ折」、「坑夫」の中では、「おとむら^{とむら}ひ」を「おともらひ」と訛つて居られる。随分甘つたれたやうな訛り方である。(164-11)

「へげ折」は『虞美人草』にその例が見える。

「おい弁当を二つ呉れ」と云ふ。孤堂先生は右の手に若干の銀貨^{せごばく}を握つて、へげ折^{へぎ}を取る左と引き換に出す。(七 4-126-11)

「へぎ折」とは、動詞「へぐ」（「板などを薄くけずり取る」の意¹⁸⁾）の連用形が名詞化した「へぎ」（折・片木・剥）に由来するものと考えられる。「へぎ」の例は古く『日葡辞書』（1603年）にもある。

Fegui. 盃 (Sacazzuqi) や何か料理などを載せるのに使う、一種の四角な薄板。(土井忠生ほか『邦訳日葡辞書』による。)

結果、「へぎ折」が本来のもので、「へげ折」は「へぎ折」の変化と考えるべきところであろう。森田が「へぎ折」が正しいと主張することは理解できる。ちなみに、『漱石全集』第4巻の校異表によると、原稿の「へげ（折）」を単行本（春陽堂 明治41年1月初版）では「へぎ（折）」にしているので、修正されたもの

16) 底本では「元」の左側に「ぐわん」の振り仮名がある。

17) 『日本国語大辞典』には以下のようにある。

薄くはぎ取った杉などの板を折って作った小型の箱。弁当などを詰めるのに用いる。おり。

18) 『日本国語大辞典』の語釈による。

であろう。¹⁹⁾

以上、森田が指摘する、漱石の東京訛りの中から語彙に関するものを取り上げた。

3. 東京訛りの実例（複合語に関するもの他）

森田は「訛り」の他に漱石の「癖」を指摘するが、その例としては複合語における要素間の順序に関するものが示されている。

私どもなら縦横十文字と云ふところを、先生は必ず「横縦十文字」と云はれる。経緯と書けば、普通なら「たてよこ」と仮名を振るべきだが、先生は一人「よこたて」と振つて居られる。私どもなら羽織袴と云ふところを、先生は「袴羽織」と云はれる。天然自然と云ふところを、「自然天然」と云はれる。尤も、これは先生ばかりでない、江戸つ子は一般に左様云ふもののだといふ説もあるが、私の知つて居る限りに於ては矢張り左様は云はない。何うも先生一人の癖のやうに思はれる。（8-3）

「よこたて」、「袴羽織」、「自然天然」など、複合語における要素の順序が通常の言い方とは反対になる例である。漱石が本当にこのような言い方を作品で用いているのだろうか。まず「よこたて」について、漱石作品に以下の例が見える。

盤の広さには限りがあつて、横堅の目盛りは一手毎に埋つて行くのだから、（吾輩は猫である・十一 1-479-12）

釣手をはづして、長く畳んで置いて部屋の中で横堅十文字に振ふつたら、環が飛んで手の甲をいやと云ふ程撲つた。（坊っちゃん・四 2-286-15）

のみならず、自分も何時の間にか、自然と此経緯のなかに織り込まれてゐる。（三四郎・五の四 5-403-8）

19) なお、森田が指摘する『坑夫』の「おともらい」について、その該当箇所は『漱石全集』で「葬」（四十六 5-130-3 校異ナシ）となっている。『漱石全集』は初出となる『大阪朝日新聞』掲載の本文を底本としているので、漱石の原稿を確認する必要があるが、他日を期すことにする。

模様の名称として「よこたてじま」という言い方もある。

黒柿^{ふき だい}の縁^つと台^{けい}の付いた長方形^{かみ}の鏡^{まへ}の前に横^{よこ}縦^{たて}縞の厚^{あつ}い座蒲団^{ぎ おんたん}を据^すゑて、
(明暗』(百八十三 11-664-3)

「よこたて」が漱石以外にもあるのか『日本国語大辞典』を参考にすると、『太平記』(14世紀後半)、『易林本節用集』(1597)、『古活字本毛詩抄』(17世紀前半)など中世以来の例が掲げられている。明治以降では、山田美妙『雨の日ぐらし』(明治24年<1891> 博文館)に、

舞^まへば舞^まふほど右^{みぎ}ひだり、上^{うへ}下^{した}、横^{よこ}縦^{たて}、前^{まへ}うしろ、(雛^{ひな}が三^{さん}足^{あし} P72-5)

という例がある。『大言海』にも、

よこたて(名) 横^{よこ}縦^{たて} よこト、たてト。又、よこ糸ト、たて糸ト。タテヨコ。とある。「よこたて」は、漱石以後においても珍しいが、わずかに宮本百合子『二つの庭』(昭和22年<1947>) ²⁰⁾に見いだすことができる。

兄よりも松浦よりもよこたてに大きいからだのすこし窮屈になったズボンの膝を行儀よく椅子にかけて、保はそんな話をしている。(十五 6-392-10)

「よこたて」は珍しい言い方に違いないが、中世から例があり、漱石だけの「癖」でないことは明らかである。

「袴羽織」について漱石作品では『行人』2例と『道草』1例がある。

出院^{しゆつゐん}のとき 袴^{はかま}羽^は織^{おり}でわざへ見舞^{みまひ}に来^きた話^{はなし}をして、何^{なん}といふ馬鹿^{ばか}だといふ顔^{かほ}付^{つき}をした。(行人・友達二十二 8-58-5)

縁女^{よめ}と仲人^{なかうど}の奥^{おく}さんが先^{さき}、それから婿^{むこ}と仲人^{なかうど}の夫^{をつと}、其次^{そのつぎ}へ親類^{しんるゐ}がつづくといふ順^{じゆん}を、袴^{はかま}羽^は織^{おり}の男^{をとこ}が^で出^でて来^きて教^{をし}へて呉^くれたが、(行人・帰つてから三十五 8-303-7)

着^きるものがないので、袴^{はかま}羽^は織^{おり}共^{とも}凡^{すべ}て兄^{あに}のを借^かりて間^まに合^あはせ^あした事^{こと}もあつた。
(道草・三十三 10-100-11)

「袴羽織」に関連する言い方として、漱石作品には「袴と羽織」「袴も羽織も」などの例がある。

20) 前掲の「まほしい」とともに宮本百合子の作品には漱石と共通する語例が多いようである。

たゞ袴と羽織を脱ぎ棄てたなり、其処へ坐つた儘、長く自分達を相手に喋舌つてゐた。(行人・塵勞十 8-339-5)

昨夜遅く其所へ脱ぎ捨てて寝た筈の彼の袴も羽織も、畳んだなり、ちやんと取り揃へて、洪紙の上へ載せてあつた。(明暗・三十九 11-124-1)

もちろん通常の「羽織袴」の例もある。

なんぼ自分の送別会だつて、越中禪の裸踊迄羽織袴で我慢して見て居る必要はあるまいと思つたから、(坊っちゃん・九 2-367-7)

海屋の懸物の前に狸が羽織、袴で着席すると、左に赤シャツが同じく羽織袴で陣取つた。(坊っちゃん・九 2-359-13)

漱石以外の「袴羽織」は、これも宮本百合子「獄中への手紙」(昭和14年<1939>9月11日)に見える。

国男今夜は袴羽織で坐っているわけです。(20-384-16)

「袴羽織」の例はこれ以外に見つけていないが、宮本百合子の使用例もあることから、これも漱石一人の「癖」ではなさそうである。

「自然天然」も珍しいが、確かに漱石に用例がある。

仕舞には一挙手一投足も自然天然とは出来ない様になる。(吾輩は猫である・十一 1-531-9)

放つて置いて自然天然寂光院に往来で邂逅するのを待つより外に仕方がない。(趣味の遺伝・三 2-235-5)

しかも芝居をして居るとは気がつかん。自然天然に芝居をして居る。(草枕・十二 3-147-1)

さうして自然天然話頭をまた島田の身の上に戻して来た。(道草・十三 10-37-9)

遠近の差等が自然天然属性として二つのものに元から具はつてゐるらしく見えた。(明暗・百七十七 11-641-1)

漱石以外では中里介山『大菩薩峠』(大正2~昭和16年<1913~1941>)にある。

たくんだわけでも、くすねたわけでも何でも無い、自然天然に授かつたので、

(山科の巻・五十三 168上-4)²¹⁾

坂口安吾『二流の人』にもある。

あなたにも之が賭博に見えますか。否々。これは自然天然の理というもので
す。(120下-5)²²⁾

なお、通常の言い方の「天然自然」も『吾輩は猫である』、『坑夫』、『三四郎』、
『明暗』などにある。

以上のとおり、「よこたて」「袴羽織」「自然天然」は漱石作品以外にも例がある
ことから、少なくとも漱石独自の「癖」とはいえない。しかし、森田の記述か
ら当時においても珍しい言い方には違いなかったと考えられるので、これらも漱
石作品の用語を特徴づけるものといえよう。

複合語ではないが、語の用法に関して興味深い例として、漱石は「惜しい」を
「欲しい」と混同していたという。

それから先生は或場合「惜しい」を「欲しい」とを混同して居られるやうだ。
『琴のそら音』の中に切支丹坂のことを「日本一急な坂、命の欲しいものは
用心ぢやへ」とあるのは、何うしても「命の惜しいものは」の間違ひであ
らなければ成らない。(8-9)

「命の欲しい」とは下記の例である。

竹早町を横つて切支丹坂へかゝる。〈略〉坂の上へ来た時、ふと先達てこゝ
を通つて「日本一急な坂、命の欲しい者は用心ぢやへ」と書いた張札が土
手の横からはすに往来へ差し出ているのを滑稽だと笑つた事を思ひ出す。
(琴のそら音 2-107-12)

この例は張札(貼り札)に書かれてあったというので、漱石自身の言い方かど
うかは定かでない。漱石自身による「命…欲しい」の確例は「文芸の哲学的基

21) 『中里介山全集』第十二巻(筑摩書房 1971年)による。

22) 『定本坂口安吾全集』第3巻(冬樹社 1968年)による。

礎」²³⁾にある。

今残つて居る奴は命の欲しい慾張り許りになつたのだと論ずる事も出来るからであります。(16-74-5)

此選択から理想が出る。すると今迄は只生きればいゝと云ふ傾向が発展して、ある特別の意義を有する命が欲しいなる。(16-76-16)

上の2例の「欲しい」は「惜しい」の意味にあたる。しかし、「命…欲しい」も漱石以前から、すでに三遊亭円朝の落語にある。

何所の国に娘の貫ひ引に咽喉を締る奴がありますか 私も命が欲しいからハイと云つて遣たら(『業平文治漂流奇談』²⁴⁾ 十二 5-140上14)

円朝は天保10年(1839)に湯島切通町に生まれ、江戸から明治にかけて活躍した落語家である(明治33年<1900>没)。その作品に確例があることから、漱石以前にも江戸語・東京語には「命が欲しい」があったことは疑いない。なお、漱石作品にも「命…惜しい」の例があつて、「命…欲しい」よりも多い。

先生悟つた様な事を云ふけれども命は依然として惜しかつたと見えて、非常に心配するのさ。(吾輩は猫である・九 1-390-4)

私だつてヴァイオリンは欲しいに相違ないですけれども、命は是でも惜しいですからね。(吾輩は猫である・十一 1-504-10)

「といふ訳でもないが、兎に角非常に命を惜がる男だから」(明暗・五十二 11-172-11)

4. 東京訛りの実例(清濁・促音に関するもの)

次に、森田は清濁の違いについても問題にしている。

23) 『東京朝日新聞』に明治40年5月4日から同年6月4日まで27回にわたって発表され、漱石の著書『社会と自分』(実業之日本社 大正2年2月)に収められている。『漱石全集』では、原稿現存の有無を確認できず参看することができなかったという。

24) 円朝落語の底本には池澤一郎・山本和明・中丸宣明校注『円朝全集 第三巻』(岩波書店 2013年)を用いる。

例へば関西人——私もその一人だが——は洗濯屋のことを「せんだくや」と云ふが、東京では決して左様は云はない、「せんたくや」と澄んで発音する。牛乳配達の場合は、私どもの田舎ぢや「はいだつ」と濁つて発音するが、東京ぢや矢張り「ぎゆうにうはいたつ」と澄むのである。それぢや関西で濁るものを東京で澄めばいゝのかと云ふに、左様とは限らない。丸で反対のもある。袴纏着の職人のして居る腹掛^{はらか}けのことを、私なぞは子供の時から「はらかけ、はらかけ」と言ひ慣らはせて来たが、東京ぢやあれを「はらがけ」と濁つて言ふのである。(洗濯屋と牛乳配達は『明暗』の中に、腹掛^{はらか}けは『草枕』の中に出て来るのだが、序だから述べて置いた。(165-11 以下)

「せんたく」、「はいたつ」、「はらがけ」は当時においても標準語形であったと考えられる。『和英語林集成』第3版(明治19年<1886>)にも、SENTAKU、HAITATSU、HARAKAKEとあって、「せんだく」、「はいだつ」、「はらかけ」にあたる立項がない。また、『大言海』においても「せんたく」、「はいたつ」、「はらがけ」の立項があるが、「せんだく」、「はいだつ」、「はらかけ」にあたる立項がない。このように「せんたく」、「はいたつ」、「はらがけ」は当時も標準語形であったと考えられる。

興味深いのは、その当時東京では「しげしげ」を「しけじけ」と言ったという記述である。

なほ濁り点の置き所が東京と田舎とで違つて居るのでは、「しけじけと相手の顔を見る」と云ふやうな例がある。かう云ふ場合、私どもなら「しげへ」と云ふのだが、東京ぢや左様は云はない。「しけじけ」と濁り点を置き代へて云ふのである。これは先生の作の到る処にさう成つてゐるから注意して御覧なさい。(166-12)

「しけじけ」とは以下のような例がある。

「尤も話しはしなかつたさうだ。黙つて鏡の裏から夫の顔をしけへ見詰めたぎりださうだが、(琴のそら音 2-102-6)

「難有う」と両手に受けた青年は、しばし此人格論の三字をしけへと眺めて居たが、やがて眼を挙げて鈍栗の方を見た。(野分・十二 3-455-15)

私は何事も知らない妻の顔をしげへ眺めてゐましたが、(こころ・百五
9-286-2)

友人は余の真面目な顔をしげへ眺めて、(思ひ出す事など・二十四 12-
427-5)

その一方で「しげしげ」もある。

千代子丈は叔母さん叔母さんと云つて、生の親にでも逢ひに来る様な朗らかな顔をして、しげへ出入をして居た。(彼岸過迄・須永の話八 7-224-10)

『日本国語大辞典』によれば、「しげしげ」(副詞)を立項して、

(「しけしけ」「しけじけ」とも。「と」を伴って用いることもある)

と語形の変異を指摘した上で、以下の語義を示し、

- (1) 数多く。しきりに。ひんぱんに。たびたび。
- (2) つくづく。よくよく。じっと。
- (3) 低い声で泣くさまを表わす語。しくしく。

それぞれ中世にさかのぼる例などを挙げている。ところが、漱石の「しけじけ」と「しげしげ」について作品の使用例で見ると両者の意味は異なっている。「しけじけ」は「眺める」(野分、思ひ出す事など、こころ)、「見詰める」(琴のそら音)等を修飾して、『日本国語大辞典』(2)の意味を表すのに対し、「しげしげ」は「出入り」を修飾して、同じく(1)の意味を表している。漱石の「しけじけ」は「しげしげ」と意味の上では区別されている。

「しげしげ」(1)の例の古いものとして『日葡辞書』(前掲邦訳による)がある。

Xiguexigue. 頻繁に、または、何度も. 例, Xiguexigue goyôu môsu. (繁々御用を申す)

「しげしげ」(1)の例も虚誕堂変手古山人の洒落本『放蕩虚誕伝』(安永4年<1775>)にある。

何の。かのと。其身分相応に。しげへ来られざる事を。いふべし。(18オ)²⁵⁾

25) 東京大学霞亭文庫の蔵本を霞亭文庫画像 (<http://kateibunko.dlitc.u-tokyo.ac.jp>) により確認できる。

漱石のような「しげじけ」(2)の例は『浮世風呂』に例がある。

平人たゞのひとがそのまねをしては。側そばでしげへへと見られるから見ぢきたなめがして穢きたならしいネエ。(三編下 218-14)

上記の例について、『日本古典文学大系』(注15参照)では「しげへへ」としているのであるが、『新日本古典文学大系』(神保五彌校注 平成元年<1989>)では当該箇所を「しげへへ」と翻字している。どちらが正しいのか都立中央図書館所蔵の『浮世風呂』初版本で確認したところ、当該箇所は疑いなく「しげへへ」となっている。『日本古典文学大系』の翻字が正しかったことになる。

漱石以後の作家における「しげじけ」(2)の例は芥川龍之介²⁶⁾にある。

もし倅せがれだつたとすれば、一わたしは夢の覚ゆめめたやうに、しげじけ首くびを眺ながめました。(報恩記 5-348-4)

女給は立ち去り難いやうにテエブルへ片手を残したなり、しげじけと谷崎氏の胸を覗きこんだ。(谷崎潤一郎氏 6-339-5)

『大言海』には、「しげじけ」と「しげしげ」が別語としてそれぞれ立項されている。

しげじけ(副) <略>ツクツク。ヨクヨク。

しげしげ(副) 繁しげ繁しげ頻しげ頻しげ 甚しげダ繁しげク。シバシバ。タビタビ。

「しげじけ」は『放蕩虚誕伝』では「しげしげ」と同様に(1)の意味があったが、『浮世風呂』以降に(2)の意味に転じたようである。漱石の当時も(1)は「しげしげ」、(2)は「しげじけ」と区別されていたことになる。森田は「相手の顔を見る」を修飾する(1)の意味であっても私どもなら「しげしげ」というと述べているので、「しげじけ」と「しげしげ」の区別は東京語特有のものでもあったようだ。

ちなみに、外山高一「東京市に於ける単語の変遷二、三」²⁷⁾にも、

〔しげじけと見る(穴ノ明ク程見ルトイウ意味。漢字ヲ用ウレバ凝視カ)(旧)
しげしげと見る(前記ノ言葉ハ現時殆ド耳ニモ目ニモ触レズ、タダコノしげしげが耳目ニ触ルルノミ、意味ハ似テ非ナルコトヲ知ル)(現)〕

26) 本文は『芥川龍之介全集』(岩波書店)による。

27) 斎藤秀一編『東京方言集』所収。

とあって、「しけじけ」と「しげしげ」の意味が異なることを記述している。しかし、外山も「現時殆ど耳ニモ目ニモ触レズ」というとおり、「しけじけ」がこの当時（昭和10年ころ）は東京においてもほとんど用いられず、「しげしげ」のみが（1）（2）両方の意味で用いられていたようである。

漱石は「端」を「はじ」としていたという。

物の端のことは矢張り「はじ」と振り仮名を付けて居られる。（167-11）

「はじ」の例は、次の『虞美人草』の例を始め多数ある。

余る力を横に抜いて、端につけた柘榴石の飾りと共に、長いものがふらりへ〜と二三度揺れる。（二 4-43-14）

巻き納めぬ手紙は右の手からだらりと垂れて、清三様……孤堂とかいた端が青いカシミヤの机掛の上に波を打つて二三段に畳まれてゐる。（四 4-74-13）

都踊の端書をよこして、其はじに京都の女はみんな奇麗だと書いてあるのよ」（六 4-106-15）

もちろん以下のような「はし」の例もある。

息も継がずに巻紙の端から端迄を一気に読み通して、思はずあつといふ微かな声を揚げた。（彼岸過迄・停留所二十一 7-94-3）

代助は赤い唇の両端を、少し弓なりに下の方へ彎げて蔑む様に笑つた。（門・二の一 6-18-5）

「はじ」は「はし」とともによく使われる語形であって、漱石独自のものではない。『大言海』にも、

はし（名）端<略>（二）物事ノ尽キムトスル所。ヘリ。ハジ。（下線小川）

とあって、「はじ」のあったことがわかる。

次に、『文章道と漱石先生』において森田は「仄音」という語を用いている。他に例をみない用語で、現代の「促音」とも全面的には一致しない。

それに仄音は省いて仕舞はれることが多かつた、『坊ちゃん』の中には、「やに落附いてやがる」と云つたやうに、「やに、やに」が頻りに出て来る。読者の方からあれば「いやに」の誤植ではないかと注意して来られた向もあつ

たやうだが、先生のもりぢや「いやに」を勢ひ込んで言ふ時、「やに」と約まつて聞こえるから、そこを表はすために、わざへ「やに」と書かれたものらしい。(167-12 以下)

「いやに」を勢いこんで言う時に「やに」とつまって聞こえるという意味での「仄音」である。「やに」は漱石作品では以下の例がある。

「御前は愚物の癖にやに強情だよ。(吾輩は猫である・十 1-450-15)

此兄はやに色が白くつて、芝居の真似をして女形になるのが好きだつた。(坊っちゃん・一 2-251-6)

どうも春てえ奴あ、やに^{からだ}身体がなまけやがって——まあ一ぶく御上がんささい。(草枕・五 3-64-2)

とはいえ、「いやに」は漱石作品では「やに」よりも多い。

其癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱心だ。(吾輩は猫である・一 1-9-3)

小供の時から、こんなに教育されるから、いやにひねつこびた、植木鉢の楓見た様な小人が出来るんだ。(坊っちゃん・三 2-277-7)

「いやに詭弁を弄するね。(虞美人草・一 4-15-13)

次の「仄音」は通常の「促音」よりは弱い発音のことである。

同じやうに「^{うき}浮がなく^{つり}ちや釣が出来ない」と云ふやうな場合、「なくつちや」でも「なくちや」でも、先生には何方でも可かつたのである。「じれつたい」とも「じれたい」とも、「ちよきり結び」とも「ちよつきり結び」とも、両方書かれたやうだが、先生のもりでは、^{はつきり}判然つを入れては余りに強く、丸で取つて仕舞つては余りに弱い程度に於て、微に仄音のつを入れて読んで貰ひたかつたものらしい。「やに」の場合も同様である。(168-5 以下)

漱石がこのような微妙な促音を用いていたということは大いに注目される。漱石作品では、「じれつたい」、「じれつたがる」、「じれつたそう」、「じれつたさ」、「じれつてえ」などの例がある。「じれたい」およびその派生語の例は漱石作品には見られない。「ちよきり結び」は『坑夫』にあるが、「ちよきり結び」の例は見られない。

^{はく}幅の^{せま}狭い^{ちやいろ}茶色の^{おび}帯を^{むすび}ちよつきり結にむすんで、^{かみ}なけなしの^{ぼんのくぼ}髪を^{かたづけ}頸窩へ片附

て其心棒そのしんぼうに鉛色なまりいろの簪かんざしを刺さしてゐる。(四十七 5-130-14)

以上、森田の指摘する漱石の「訛り」について実例を挙げつつ検討した。これらの多くは当時としても珍しい言い方であったかもしれないが、漱石以外の作品や資料に例のあるものが多く、漱石独自の用例といえるものはほとんどない。漱石が「訛り」を指摘されても変更に応じなかったという理由も、必ずしも漱石の言い誤りではないという自信があったからであろう。そのことは上記の検証によって明らかになった。

5. 「江戸語」を意味する「江戸っ子」とアイ・アエ>エーの音訛

漱石や森田のことばづかいで注目されるのは、「江戸っ子」を「江戸語」（江戸・東京下町のことばづかい）の意味で用いることである。たとえば、森田は『坊っちゃん』への言及の中で、「江戸語」に「えどっこ」という振り仮名を付している。

『坊っちゃん』の江戸語えどっこは生地きぢの儘えどっこの江戸語である。江戸で生れて、江戸で育つた生粋の江戸っ子が——私どもは今でもたまには左様いふ爺さん婆さんに出会ふことがある——普通差向ひで話して居るやうな調子である。従つて何方かと云へば、硯友社の言文一致よりは落語のそれに近い。(157-6 以下)

同様の「江戸っ子」はすでに漱石自身が用いている。

ちや演説をして古賀君を大いにほめてやれ、おれがすると江戸っ子のべらへになつて重みがなくていけない。(坊っちゃん・九 2-358-7)

「ふん、左右さうでもあるめえ」

わざと江戸っ子を使つた叔父は、さういふ種類しゆの言葉ことばを、一切家庭かみに入れてはならないものの如ごとくに忌み嫌きらふ叔母おぢいの方はうを見た。(明暗・六十一 11-201-15 以下)

ところで、森田のいう「江戸語」とは、現在一般に学術用語として用いられる概念とは相違がある。森田の説明によれば、「江戸で生れて、江戸で育つた生粋の江戸っ子」が用いる言語という。森田のいう「江戸」には「東京」を含めて理

解する。しかも、「落語に近い」という説明からも解るように、「江戸語」とは「下町ことば」のことと判定される。森田の「江戸語」とは、「江戸時代以来の流れをくむ当時の下町ことば」という意味で、それを「江戸っ子」とも称しているのである。漱石の「江戸っ子」も同様である。²⁸⁾のみならず、上記の例で「江戸っ子」を使った岡本に対して、叔母（岡本の妻）が「さういふ種類の言葉を、一切家庭に入れてはならないものことの如くに忌み嫌ふ」とあるとおり、当時は下町ことばを蔑む風潮があったようである。

漱石は自身の作品において、山の手ことばを用いるか、下町ことばを用いるかによって人物造形を行っている。その典型的な例として、『草枕』の主人公の画工である「余」と東京下町出身の床屋との会話がある。ここでは山の手と下町のことばづかいの違いが話題にされている。

「失礼ですが旦那は、矢つ張り東京ですか」

「東京と見えるかい」

「見えるかいつて、一目見りやあ、——第一言葉でわかりまさあ」

「東京は何所ところだか知れるかい」

「さうさね。東京は馬鹿に広いからね。——何でも下町ぢやねえやうだ。山の手だね。山の手は麴町かね。え？ それぢや、小石川？ でなければ牛込か四つ谷でせう」

「まあそんな見当だらう。よく知つてるな」（五 3-57-2 以下）

当時はことばづかいで下町出身か山の手出身か見当がついたということである。この床屋は下町ことばの話し手で、神田松永町の出身と称している。床屋の挙げた麴町、小石川、牛込、四つ谷等の地名は当時の区名に一致する。「余」の

28) 掲掲『明暗』の「江戸っ子」について、『漱石全集』第11巻の注解（十川信介執筆）には、「江戸っ子風の巻舌を使ったしゃべり方の意。」とある。また、漱石や森田以外における同様の例は上司小剣『太政官』（大正4年）にある。（『鱧の皮 他五篇』所収 岩波文庫 岩波書店 1952年）

「お前は阿呆やけど、東京へいてたさかい江戸ツ児（東京弁の事）がえらう上手やな、誉めたる。」（八 184-5）

ただし、この「江戸っ子」は東京のことば全般を指しているようである。漱石の「江戸っ子」のように、東京下町のことばを限定的に指すものではない。

出身地はこの会話からすれば山の手の牛込(区)か四谷(区)であることになるが、あいまいにしている。漱石の誕生した馬場下横町は当時牛込区に属していた。『草枕』の床屋以外にも漱石作品には下町ことばを使う人物が登場する。もちろん下町と山の手で共通する語彙・語法も多いのだが、両者をもっとも明確に区別できる特徴はアイ・アエ>エーの音訛である。アイ・アエ>エーは江戸語や関東方言における際だった特徴の一つであるが、漱石作品では使用例、使用者ともにさほど多くはない。アイ・アエ>エーの例は『坑夫』以外の漱石作品の中では下記の数人に限られ、いずれも東京下町の出身者もしくは下層の人物らしく造形されている。

吾輩は猫である：黒(猫)、車夫、重太郎、重太郎の仲間

草枕：床屋

明暗：岡本、連れの男

『坑夫』では登場する多くの坑夫たちがアイ・アエ>エーを用いているが、彼らの出身地が明示されてはいないので、参考例にとどめる。おそらく坑夫たちが下層の人物であることをことばづかいで表そうとしたものと考えられる。

アイ・アエ>エーの例を登場人物ごとに整理して掲げる。

吾輩は猫である・黒

彼は大に軽蔑せる調子で「何猫だ？ 猫が聞いてあきれらあ。全てえ何こに住んでるんだ」随分傍若無人である。「吾輩はこゝの教師の家に居るのだ」「どうせそんな事だらうと思つた。いやに瘠てるぢやねえか」と大王丈に気焰を吹きかける。言葉付から察するとどうも良家の猫とも思はれない。(一

1-13-7 以下)

同・車夫

「あの教師あ、うちの旦那の名を知らないのかね」と飯焚が云ふ。「知らねえ事があるもんか、此界限で金田さんの御屋敷を知らなけりや眼も耳もねえ片輪だあな」是は抱へ車夫の声である。(三 1-125-7 以下)

同・重太郎とその仲間

重太郎は「やあ」と云つたが、やがて「民さんはどうしたね」と聞く。「ど

うしたか、ぢやん〜が好きだからね」「ぢやん〜許りぢやねえ……」「さうかい、あの男も腹のよくねえ男だからね。——どう云ふもんか人に好かれねえ、——どう云ふものだから、——どうも人が信用しねえ。職てえものは、あんなもんぢやねえが」「さうよ。民さんなんざあ腰が低いんぢやねえ、頭が高けえんだ。夫だからどうも信用されねえんだね」(七 1-292-3 以下)

『明暗』における連れの男

津田は服装に似合はない思ひの外潤達な此爺さんの元気に驚ろくと同時に、どつちかといふと、ペランメーに接近した彼の口の利き方にも意外を呼んだ。

<略>爺さんはすぐ答へた。

「何高が雨だあね。濡れると思やあ、何でもねえ」(百六十八 11-604-9 以下)

漱石がアイ・アエ>エーをとりわけ品の無い訛りと見なしていることは『吾輩は猫である』に登場する中学校の生徒のこぼづかいへの言及にも現れている。

這入れば活潑なる歌をうたう。高声に談話をする。而も君子の談話だから一風違つて、おめえだの知らねえのと云ふ。そんな言葉は御維新前は折助と雲助と三助の専門的智識に属して居たさうだが、二十世紀になつてから教育ある君子の学ぶ唯一の言語であるさうだ。(八 1-312-2 以下)

『浮世風呂』を始め、江戸語の資料によれば、アイ・アエ>エーは男女問わず多くの町人が用いていて、必ずしも折助、雲助、三助だけが用いていたわけではないが、このような誇張した言い方からも漱石がアイ・アエ>エーを皮肉たっぷりに軽蔑していることが見て取れる。アイ・アエ>エーの例は洒落本や滑稽本など江戸語の資料にも多く現れているが、松村明、小松寿雄、福島直恭らによって、主として下層社会の町人が用い、上層社会では用いられないことが明らかにされている²⁹⁾。これらの研究によっても、漱石のいう折助、雲助、三助を身分の低い

29) 松村明『江戸語東京語の研究』(東京堂出版 1957年)

小松寿雄「浮世風呂における連母音アイと階層」(『国語と国文学』59-10 1982年)

『江戸時代の国語 江戸語』(東京堂出版 1985年)

福島直恭『<あぶない ai>が<あぶねえ e :>にかわる時 日本語の変化の過程と定着』(笠間書院 2002年)

者の代表例と捉えれば、これが裏付けられる。また、前掲の例で、延子の叔父岡本が「江戸っ子」を使うという言い方をしているが、岡本の言で江戸語的な特徴のあるのは、「あるめえ（<まい）」のみである。これからも漱石はアイ・アエ>エーを江戸語の特徴と捉えていたことが分かる。

6. その他の東京訛り

漱石作品においては、アイ・アエ>エー以外にも下町のことばづかいがある。紙幅の都合もあるので、主なものに限って、(1) 音訛、(2) 助詞・助動詞、(3) 語彙に分類して挙例する。

(1) 助詞・助動詞等の音訛に関するもの

①助詞「は」がアとなるもの

「己れあ車屋の黒よ」（吾輩は猫である・一 1-13-12）

「旦那あ、余り見受けねえ様だが、何ですかい、近頃来なすつたのかい」（草枕・五 3-60-15）

実あ、私わつしもあの隠居さんたよつを頼て来たんですよ。（草枕・五 3-61-4）

②助詞連続「とは」がタアとなるもの

しやけの一切や二切で相変らずたあ何だ。（吾輩は猫である・二 1-45-9）

「本物たあ何だい」（吾輩は猫である・九 1-393-13）

いくら下宿の女房だつて、下女たあ違ふぜ。（坊っちゃん・六 2-310-14）

「当たり前でさあ。本家あにきの兄たあ、仲がわるしさ」（草枕・五 3-62-3）

兄さんも外ほかの事ことあ違ふんだから、最もう少すこし打うち解とけて緩ゆつくり聞きいて下くださらくつちや。（行人・兄四十三 8-203-10）

③「という」がテーとなるもの

職人てえものは、あんなもんぢやねえが」（吾輩は猫である・七 1-292-7）

「へえ、君の伯父さんてえな誰だい」（吾輩は猫である・三 1-109-4）

あすこに龍閑橋てえ橋がありませう。（草枕・五 3-58-3）

「はたるてえものは、昔むかしは大分流行たもんだが、（それから・十一の四 6-183-4）

「あれだね、義太夫を遣るつてえのは」(明暗・百八十 11-650-12)

④動詞の語尾「る」に終助詞「わ」のついた「るわ」がラーとなるもの

「何猫だ？ 猫が聞いてあきれらあ。(吾輩は猫である・一 1-13-8)

「なに細君はびんへして居らあね。(吾輩は猫である・二 1-77-1)

「ええ、焦心てえ。間違つてらあ。(草枕・五 3-65-9)

「成程哲学者丈らあ。(虞美人草・一 4-8-5)

「あんな嘘を吐いてらあ」(道草・四十二 10-128-1)

「其位な事は御前に教はらないだつて、誰だつて知つてらあ」(明暗・六十四 11-213-2)

⑤「ですわ」がデサーとなるもの

「まあそんなに不平を云はんでも善いでさあ。(吾輩は猫である・三 1-94-2)

「何でもい、でさあ、——全く赤シャツの作略だきりやくね。(坊っちゃん・八 2-347-14)

なあに猫の額ひたい見た様な小さな汚ねえ町でさあ。(草枕・五 3-58-2)

「可笑しかないが、身体からだに合はないでさあ」(虞美人草・十六 4-347-4)

だつてそりや昔しも昔し、ずつと昔しの話はなしでさあ。(道草・二十七 10-80-7)

⑥「ますわ」がマサーとなるもの

「一体あの甘木さんが悪う御座いますよ、あんまり三毛を馬鹿にし過ぎまさあね」(吾輩は猫である・二 1-83-11)

「本家は岡の上にあるまさあ。(草枕・五 3-62-5)

「其代り生存競争も烈しくなるから、内部は益不作法になりまさあ」(虞美人草・十六 4-349-3)

なに試験しけんなんか何うにか斯うにか遣つ付けまさあと受合つた所に、満更むらの虚勢も見えなかつた。(彼岸過迄・松本の話七 7-327-9)

それに大抵の人はもう忘れてしまひまさあね。(道草・六十四 10-195-8)

他にも文末をダー、ラー、サーなどと延ばす言い方が目立つが、これは終

助詞ワが、ダワ>ダー、ルワ>ラー、スワ>サーと転じたものである。

⑦「なんぞは」が変化したナンザ・ナンザー

「何にお-れなんざどこの国へ行つたつて食ひ物に不自由はしねえ積りだ。

(吾輩は猫である・一 1-14-5)

雅号なんざ、どうだつて、^{もの}質さへ慥かなら構はない主義だ」(虞美人草・一
4-21-7)

「子供なんざ、無^なくても可^いいぢやないか。(門・十三の四 6-501-13)

「^{あなた}貴方なんざあ、失礼ながら、まだ学校を出た^{ばかり}許で本当の世の中は御存じな
いんだからね。(彼岸過迄・風呂の後七 7-20-9)

「然しこんだの事なんざあ、島田がぢかに比田の^{ところ}所へ持^もち込^こんだんだからね
え」(道草・三十七 10-112-5)

⑧副詞等の語末の리가シとなるもの

江戸・東京ではり [ri] が強く発音される結果シ [ʃi] となるものであろう。

どうも薩^{みさげ}ばし、見境のねえ女だから困つちまはあ」(草枕・五 3-64-5)

えへ、。からつきし、どうも、人間もかうなつちや、みじめですぜ」(草
枕・五 3-57-11)

其の行く先^{ゆき}はどんな^{ところ}所だらうてえんだ。矢張こんな^{ところ}所かしら」(坑夫・
五十四 5-151-12)

斎藤秀一「旧市域の訛語」にも、ri と ʃi の交替の例として、アンマシ、バカ
シ、ヤッパシが掲げられている (P315)。リ>シは一般的に起きるのではなくて、
主として副詞 (バカシは助詞「ばかり」の変化) の語末において起きていること
に共通性がある。江戸・東京ではこの環境において [ri] が強く発音される傾向が
あるものと考えられる。

(2) 助詞・助動詞に関するもの

①動詞の連用形について命令を表す「ねえ」

御-めへのう-ちの主人を見ねえ丸で骨と皮ばかりだぜ。(吾輩は猫である・
一 1-14-3)

此畜生つて気で追つかけてとうへ泥溝の中へ追ひ込んだと思ひねえ」(吾

輩は猫である・一 1-15-15)

今日は勘弁するから、此次から、捏ね直して来ねえ」(草枕・五 3-69-6)

カシテラの前に一つ草鞋を穿いちまいねえ」(坑夫・六十一 5-170-11)

②丁寧を表す「がす」

「痛うがすかい。(草枕・五 3-58-6)

「そんなに倦怠うがすかい。(草枕・五 3-64-2)

坑夫でなくつても、好うがすかい」(坑夫・四十六 5-128-7)

「そんなに人が悪うがすかな」(明暗・六十八 11-225-13)

「やあお早うがす。(明暗・百六十九 11-609-10)

当時の資料では三遊亭円朝『真景累ヶ淵』³⁰⁾に多くの例が見える。

女を殺して金を盗んだ奴がある、宜うガスカ (二十九 5-274 下8)

鎌は話らねえが、宜うガスカ (二十九 5-276 上12)

宜うがすナ御導場の向ふが (六十二 5-254-11)

③丁寧を表す「げす」

「げす」は特殊な語例で、『坊っちゃん』の野だいこなど、特定の人物に偏っている。

べらへした透綾の羽織を着て、扇子をぱちつかせて、御国はどちらでげす、え？ 東京？ (坊っちゃん・二 2-267-12)

沖釣には竿は用ゐません、糸丈でげすと顎を撫で、黒人じみた事を云つた。(坊っちゃん・五 2-294-2)

野だは絶景でげすと云つてる。(坊っちゃん・五 2-294-7)

野だが、鈴ちゃん逢いたい人に逢つたと思つたら、すぐ御帰りで、お気の毒さま見た様でげすと相変らず噺し家見た様な言葉使ひをする。(坊っちゃん・九 2-366-4)

『明暗』にも2例の「でげす」がある。

「只今は生憎季節が季節だもんでげすから、あんまりお出が御座いません。

30) 『やまと新聞』明治20～21年<1887～88>連載。二村文人・延広真治校注『円朝全集 第五巻』(岩波書店2013年)による。

(手代の会話。明暗・百七十一 11-617-10)

「いえ、御覧の通り平地の乏しい所でげすから、地ならしをしては其上へ建て建てして、家が幾段にもなつて居りますので、(庭掃の男の会話。明暗・百七十八 11-643-9)

湯澤幸吉郎『増訂江戸言葉の研究』(明治書院 1981)によると、

「げす」は広く一般に行われた語ではないが、江戸末期になると、「でげす」が、職人仲間などにはかなり普通に用いられ、明治の初期にも続いた(P446)

と述べられ、小学館『古語大辞典』(1983)「げす」語誌(小島俊夫)には、

江戸末期から明治初期にかけて、芸人や通人などの間に多く用いられた語で、「でげす」「でげす」の形で助動詞「です」の形で用いられる。

とある。漱石の作品では『坊っちゃん』の「野だいこ」(美学教師)の使用例が多いが、「嘶し家見た様な言葉使ひ」(前掲例下線部)ということは、芸人や通人などの間に多く用いられたといわれることと合致するものである。ちなみに、落語における「げす」として三遊亭円朝の作品には多数の例がある。『真景累ヶ淵』の例を挙げよう。

「へ、何と云て殿様申し上るのはお気の毒でげすが(二 5-190 上 11)

「へエ左様でげすか(九 5-213 上 15)

「因縁でげすナ(十一 5-217 上 15)

また、従来「げす」は明治初期まで用いられたといわれるが(前掲湯澤、小島文献)、漱石が『坊っちゃん』や『明暗』に用いていることから、その使用時期を下げて考えることもできるのではないか。

(3) 語彙に関するもの

①自称代名詞「わっし」、「わっち」

なにね、あの隠居が東京に居た時分、わっしが近所にて、——それで知つてるのさ。(草枕・五 3-61-5)

わっしの剃で痛けりや、何所へ行つたつて、我慢出来つこねえ(草枕・五 3-62-8)

「かう見えて、私も江戸っ子だからね(草枕・五 3-57-9)

②自称代名詞「こちとら」

こちとらあ斯うして茲で生れたもんだが、民さんなんざあ、どこから来たんだか分かりやしねえ」（吾輩は猫である・七 1-292-10）

こちとら丈で儲ける仕事なんだから、諦めて早く帰れと云ふんである。（坑夫・五十 5-141-8）

「此方とらとは少し頭の寸法が違ふんだ。（道草・百一 10-314-8）

ことに此方徒等見たいな気の早いものにはお詠向だあね。（明暗・百六十九 11-608-9）

「こちとら」について、『浮世風呂』には「こちと」の例があり、「こちとら」はこれに接尾語「ら」が付いたものである。

なんでもこちとは貪惜しねへのさ。（二編上 122-15）

こちとは楽はせずといひから、（二編下 159-9）

③感動詞の「べらぼう」

「箆棒めうちなんかいくら大きくたつて腹の足しになるもんか。（吾輩は猫である・一 1-14-9）

飛び込みながら「箆棒に温るいや」と云つた。（吾輩は猫である・七 1-292-1）

箆棒め、先生だつて、出来ないのは当り前だ。（坊っちゃん・三 2-272-4）

「箆棒め、イナゴもバツタも同じもんだ。（坊っちゃん・四 2-285-2）

「箆棒め、腕が鈍いつて……」（草枕・五 3-69-10）

④「がながらがん」

行き当りを見ると一間程の入口が明け放しになつて、中を覗くとがながらがんのがあんと物静かである。（吾輩は猫である・七 1-283-12）

「違ねえ、がながらがんだから、殻切、話に締りがねえつたらねえ。（草枕・五 3-64-8）

梯子の通る一尺幅を外れて、がながらがんの壁が眼に映る。（坑夫・八十 5-225-3）

「がながらがん」とは、ブリキ缶などをたたいたり落としたりした時にでる音

を表すことから、建物や部屋の中に何もいさまを意味する俗語である。

このように見てくると、漱石作品には多くの東京訛りがあるが、このようなところが当時一般的な東京人の用いる言語、すなわち東京語の実態であったのだろう。東京人といえども常に標準語を用いているのではない。周知のとおり、標準語は確かに東京語を基盤とするものではあるが必ずしも全同といえない。この事実が漱石作品の会話文を通してあらためて確認されるのである。

7. 漱石が東京訛りにこだわる理由

ここまで述べたところをまとめると以下のとおりである。

(1) 漱石作品の会話では東京語（山の手ことば・下町ことば）が用いられているが、森田草平『文章道と漱石先生』にも指摘されているとおり、当時の標準語的な語彙・語法と異なる場合がある。

(2) 森田が指摘する漱石の「訛り」（東京訛り）は珍しい語例には違いないが、漱石以外の作品・資料等にも例があるものがほとんどで、漱石独自のことばづかいとはいえ、森田のいう漱石の「癖」でもない。

(3) 森田の指摘以外にも漱石作品には多くの下町のことばづかいを見いだすことができる。

漱石作品において東京語を多用することについて、それはいかなる理由によるものであろうか。この理由については、やはり森田の発言が参考になる。

先生がこんなに江戸つ子の訛に気を使つて居られたと云ふことは、又必ずしも先生が自ら純江戸つ子を以て^處られたからと云ふ訳ではない。それに依つて作中の人物を活躍させようと計られたのである。如何にそれに依つて、先生の思はく通り作中の人物が活躍してるかは、『坊ちやん』の例を見て明かだから、再び贅しない。（169-4 以下）

漱石自身が純粋な江戸っ子であったというわけではなくて、作中の人物を生き生きと活躍させるという見解である。森田のこの見方は要所をついていると思うが、そうすると「訛り」「癖」という捉え方とは矛盾するのではないか。「訛り」

「癖」であれば、それは漱石の無意図的な用法ということになる。しかし、漱石が作中人物を「活躍」させようとしたならば、意図的な使用でなければならない。また漱石が「訛り」「癖」の修正に頑として応じなかったということには強い意志を感じさせる。事実、本稿で考察したとおり、森田のいう「訛り」「癖」にも江戸語以来の類例をもち、他の作家が用いた例もあるので、決して漱石個人の誤りとはいえないものがほとんどである。唯一「へげ折」は既述のとおり誤りであったようで、『虞美人草』の単行本では修正されている。森田のいう「訛り」「癖」の使用は、その当時実際に用いられていた言語（下町ことばを含む東京語）であることから、これを用いた方が登場人物の会話において現実味を増すのであって、登場人物を活写する上に大きな効果があったであろう。漱石の目的もそこにあって、そのために東京訛りをかなり意図的に用いているのではないかと考えられる。